論　文　ニダバ (*Nidaba*) 35(2006), 75-84

日本語・イタリア語比較対照研究

―「行く／来る」vs「andare／venire」―

古　浦　敏　生

§1　はじめに

日本語の「行く」と「来る」はいわゆる反意語（antonym）である。反意語はしばしば類義語（synonym）と対立するものとされ、その結果、互いに意味が遠くかけ離れている語と考えられがちであるけれども、反意語を成立させる反義性は、意味上一定の共通性を前提としている。すなわち、「行く vs 来る」は動作が反対方向に在る関係であって、「行く vs 遊ぶ」よりも互いに意味的に近い。イタリア語においても「andare」と「venire」は反意語であって、「andare」は「行く」に、「venire」は「来る」に対応する語である。

筆者はここ数年来、日伊両言語の比較対照研究を進めている[1]。資料的には日本文学作品とその伊語訳を手掛りとする場合が多い。本稿では夏目漱石（1867-1916）の晩年の作品『こころ』を取り上げたい。その日本語原文[2]と伊語訳[3]を読み比べていくうちに、次の箇所に遭遇した。用例末の数字は出現ページ数である。

(例 1a) 私は次の日も同じ時刻に浜へ<u>行って</u>先生の顔を見た。(11)

(例 1b) Anche il giorno dopo <u>andai</u> alla spiaggia a quell'ora, e lo vidi. (9)

(例 2a) 最初一緒[4]に<u>来た</u>西洋人はその後まるで姿を見せなかった。(11)

(例 2b) Lo straniero che all'inizio <u>era venuto</u> con lui non lo si vide più. (9)

(例 3a) 誰の墓へ参りに<u>行った</u>か、妻はその人の名を云いましたか。(16)

(例 3b) Mia moglie ti ha detto il nome della persona a cui <u>vengo</u> a far visita al cimitero? (13)

(例 4a) その時の私は既に大学生であった。始めて先生の宅へ<u>来た</u>頃から見るとずっと成人した気でいた。(30)

(例 4b) Io ero già studente universitario, allora, e più maturo di quando <u>ero andato</u> per la prima volta a casa del maestro. (23)

たとえば、(例 1a)の「行って」は(例 1b)では「andai(andare の直説法遠過去 1 人称単数)」で訳されているし、(例 2a)の「来た」は(例 2b) では「era venuto(venire の直説法大過去 3 人称単数)」で訳されている。このように (例 1) (例 2)を見る限り、「行く」は「andare」と、「来る」は「venire」と、それぞれ整合性の有る対応関係を示していると思われる[5]。

しかし、(例 3a)の下線部「行った」は(例 3b) では「vengo(venire の直説法現在 1 人称単数)」で訳されているし、(例 4a)の下線部「来た」は(例 4b)では「ero andato(andare の直説法大過去 1 人称単数)」で訳されている。このように「行く」と「来る」が逆方向になった対応はどのような環境で生ずるのであろうか。

§2　先行研究

日伊両言語比較対照はまだ緒に就いたばかりであって、この種のテーマに関しても先行研究は未だ行われていないように思われる。

日本語に関しては、森田良行「「行く・来る」の用法」(国語学会編『国語学』第 75 号、1968、pp.75-87) が詳しい。これは『現代日本文学選集』(細川書店刊) 所収の近・現代作家 55 名の小説各 1 編から「行く／来る」の用例 4939 種を採集・分析したものである。森田氏によれば、"「行く／来る」には(1)話し手の現実的位置からとらえた行き来表現と、(2)転移して観念的な位置から見た行き来表現との二様の「行く／来る」が存在する" とされている。そして、転移が比較的行われやすい【網掛け古浦】条件として次の 5 項目を挙げておられる。

① 話し手がこれから行くべき地点への他者移動。話し手の気持がすでに目的地点に転移していて、移動主体を「来る」と迎える意識が働く。まだそこにいないにもかかわらず、これから行くべき地点はすでに自己の側に属するもの、自己の勢力圏内の地点だとの意識が働く。たとえば「お前も来るなら来い (志賀直哉「和解」)」。

② 話し手自身の側に属すると意識される地点 (話し手の家・室・仕事場・事務所・学校など) への移動。話し手の現在位置以外であるにもかかわらず「来る」を用いることが多い。たとえば「それではきたないですが、仕事場に来て戴きますか (武者小路実篤「ある彫刻家」)」。

③ 聞き手の現在位置への移動にも「来る」を用いることがある。「自己の側へ」の意識は、話し手の勢力圏内のみにとどまらず、聞き手の勢力圏に対しても作用を及ぼす。これは聞き手側に属するものはすなわち話し手自身の側でもあるという一体感に基づく。たとえば「モシモシ、君んとこへいま田中君が来るからね」。電話や書簡のように両者が別々の場所にいるにもかかわらず「来る」を用いるのは、話し手が聞き手と同じ場にあるとの意識から生まれた発話だからである。

④ 聞き手側に属すると意識される地点への話し手および他者移動も「来る」を用いることがある。これはもちろん話し手・聞き手がそこ以外にあって発話する場合に限る。たとえば「あした君の事務所へうちのせがれが来るかもしれないよ」。これも話し手・聞き手の一体感から生まれた表現と言えよう。

⑤ 話題にしている場面への話し手および他者移動にも「来る」を用いることが多い。ここで「話題にしている場面」とは、話し手が観念的に描いている場面であり、当然、話

し手もその場面内に転移していると考えねばならぬ。その場面内へ移動することは、転移した話し手側へと接近することであり、「来る」が用いられる。たとえば「やがて婆さんはそこから二・三丁さきの警察署にやって来たが…（伊藤永之介「鶯」）」。

さらに、森田氏は「行く／来る」が単独で用いられる場合のほかに、助詞「に／て」を介して「行く／来る」に接続する例を「Vニ行ク／来ル（たとえば、見に行く、飲みに来る【用例は古浦が補足】）」・「Vテ行ク／来ル（たとえば、連れて行く、抱いて来る）」としてまとめ、分析しておられる。

イタリア語の「andare／venire」の用法に関しては、『ガルザンティ・イタリア語辞典』の記述を引用しておこう。「andare」の用法としては、muoversi da un luogo verso un altro「或る場所から別の場所へ移動する」とあり、その用例として andare da Roma a Milano「ローマからミラノへ行く」が挙げられている。「venire」の用法としては、recarsi nel luogo dove è o dove va la persona a cui ci si rivolge o la persona stessa che parla「聞き手または話し手自身の居場所または行き先へと移動する」とあり、その用例として、Verrò da voi a Roma.「私はあなたたちの居るローマへ行くでしょう【聞き手の居場所への移動】」、Vieni a casa mia.「君は私の家へ来なさい【話し手の居場所への移動】」、Veniamo con voi.「我々はあなたたちと一緒に行きます【聞き手の行き先への移動】」、Vieni con me al cinema?「君は私と一緒に映画に行きませんか【話し手の行き先への移動】」が挙げられている【用例の一部は池田廉ほか編『伊和中辞典』第2版、小学館、1999より補強】。

これらの用法のうち、森田氏ご指摘の「転移の条件①・②」と伊語の「話し手の行き先への移動」・「聞き手の行き先への移動」はともに、「話し手が聞き手とともに現在地点から目的地点へ移動する場合」、すなわち、「話し手が聞き手と同行する場合」である。この際、日伊両言語では「来る／venire」が現われるとされている。しかし、これは絶対的な条件ではなく、「比較的行われやすい（前節における古浦の網掛け部分を参照）」条件なのである。つまり、例外の出現が示唆されているということであり、その精査が必要であろう。

§3　本稿の目的

本稿の目的は次の2点である。

【目的1】日伊両言語において、「行く」が「venire」で訳されたり、「来る」が「andare」で訳されたりする環境、すなわち、逆方向の対応が生ずる環境を解明すること。

【目的2】日伊両言語において、「話し手が聞き手と同行して現在地点から目的地点へ移動する場合」、「行く／andare」と「来る／venire」のいずれが対応するのかということ、また、その理由を解明すること

§4　用例の収集方法とその集計結果

「行く／来る」には「納得が行く」・「うまく行く」・「そう来なくっちゃ」のような慣用

表現や、「生きて行く」(時間的継続)・「不和から来る憎しみ」(起因)・「考えが現れて来る」(発生)・「情熱が高まって来る」(変化)のような、「本来的な移動」とは言いがたい表現も存在する。これらの用例は本稿では除外することとし、日本語原文に現われる「出発地から目的地へと向かう人間の身体的移動」の用例のうち「andare/venire」で訳されている用例のみを対象にすることとした。そして、「行く/来る」が単独で用いられている場合と、動詞要素が助詞「に/て」を介して「行く/来る」に接続している場合(以下、森田氏に従って、「Vに行く/来る」「Vて行く/来る」と表記)とに分けて集計した結果を一覧表にしたのが第1表である。

第1表

移動動詞		andare		venire	
行く	行く(単独)	35	49	3	5
	Vに行く	9		1	
	Vて行く	5		1	
来る	来る(単独)	3	4	13	28
	Vに来る	0		7	
	Vて来る	1		8	

第1表によれば、"「行く」と「andare」との対応が最も多く49例、次いで「来る」と「venire」との対応が28例、「行く」と「venire」との対応が5例、「来る」と「andare」との対応が4例であった。さらに、単独で用いられた「行く」と「venire」との対応が3例、動詞要素が助詞「て」を介して接続している「来る」(すなわち、「Vて来る」)と「andare」との対応が1例であった"などのことも分かる。

§5 用例の分析(その1)

本節では【目的1】の解明をめざして逆方向の対応が生じた用例を精査することにする。

(1)「行く」が「venire」で訳されている場合…用例数小計5

①「行く」が単独で用いられている場合…用例数3

(例5a)奥さんは自分一人で行くとは云いません。私にも一緒[3]に来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと云うのです。(177)

(例5b)Lei non volle andarci da sola, ma mi ordinò di accompagnarla, insistette perché venisse anche la figlia. (142)

ここは、「自宅(出発地)」に居る「奥さん」と「私」と「お嬢さん」が一緒に「日本橋(目的地)」へ買物に出かける場面である。日本語では「行く」が用いられているが、「話し手(奥さん)」の行き先への他者の同行であるので、イタリア語では「venire」が用いられている。なお、このような同行の「行く/来る」に関しては§6で詳述することにする。

(例6a)玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのですから…(197)

(例6b)La casa era disposta in modo tale che, venendo direttamente dall'esterno, si

trovava il soggiorno, la stanza della signora e della figlia, poi, girando a sinistra, quella di K e la mia. (160)

ここは、「私」が帰宅直後、「玄関（出発地）」から「私の室（目的地）」に向かおうとしている場面である。日本語では「行く」が用いられているが、イタリア語では「venire」が用いられている。これは、「私（移動主体）」の側に属すると意識される目的地（「私の室」）への移動であることに起因しているものと思われる。

(例 7a)私が誘いさえすれば、また何処へ行っても差支えない身体だったのです。(201)

(例 7b)Ma se io lo invitavo, non aveva motivo per non venire con me.(163)

ここは、「下宿（出発地）」に居る「私」が同宿の「K氏」を夏期休暇の旅行に誘っている場面である。日本語では「行く」が用いられているが、イタリア語では、「話し手（私）」の行き先（旅行先が目的地）への他者の同行なので、「venire」が用いられている。（同行の「行く／来る」に関しては§6で詳述）

②「Vに行く」の場合…用例数 1

(例 8a)私は私がどうして此所へ来たかを先生に話した。「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名を云いましたか」(16)

(例 8b) Gli spiegai com'ero arrivato in quel luogo. 《Mia moglie ti ha detto il nome della persona a cui vengo a far visita al cimitero? 》(13)

ここは、「先生（話し手）」が「此所=墓地（目的地）」で「私（聞き手）」に話しかけている場面である。「先生」は「自宅（出発地）」を、「私」は「下宿（出発地）」を、それぞれ出発して既に「此所=墓地（目的地）」に到着している。但し、「妻（=先生の奥さん）」は「自宅（出発地）」に居る。したがって、(例 8a)では「墓地に行く」となっていても、実際は「墓地に来ている」ので、イタリア語では「venire」が用いられているものと思われる。

③「Vて行く」の場合…用例数 1

(例 9a)「私は」と先生が云った。「私はあなたに話す事の出来ないある理由があって、他と一緒にあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行った事がないのです」(20)

(例 9b) «Io» disse, «non voglio andare a far visita al cimitero con qualcuno, per una ragione che non ti posso spiegare. Nemmeno mia moglie è mai venuta con me»(16)

ここは、「先生（話し手）」が「先生の自宅（出発地）」で、「私（聞き手）」に話しかけている場面である。先生は「妻」と一緒に「墓所（目的地）」に向かうことになる。日本語では「行く」が用いられているが、「話し手」の行き先への他者の同行なので、イタリア語では「venire」が用いられている。（同行の「行く／来る」に関しては§6で詳述）

(2)「来る」が「andare」で訳されている場合…用例数小計 4

①「来る」が単独で用いられている場合…用例数 3

(例 10a)その時の私は既に大学生であった。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずっと成人した気でいた。(30)

(例 10b)Io ero già studente universitario, allora, e più maturo di quando ero andato per la prima volta a casa del maestro.(23)

ここは、「私」が「下宿（出発地）」から「先生宅（目的地）」に行ったのだが、あいにく留守で、私は座敷へ上がって奥さんと話をしている場面である。したがって、私は「先生宅（目的地）」に既に到着しているので、日本語では「来る」が用いられているが、イタリア語では「andare」が用いられている。しかし、既に目的地に到着している(例 8b)の場合同様、ここは「venire」が用いられてもよさそうに思われる。

(例 11a)それ【=電報】には来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。(124)

(例 11b)Con una sola frase diceva che non era necessario che io andassi, e niente altro.(99)

ここは、「帰省先（出発地）」に居る「私」宛に東京の先生から届いた電報の内容について述べたものである。(例 11a)の「来ないでもよろしい」と打電した者は「東京に居る先生（発話者）」であり、その先生の視点からの発話であるから、私は「東京へ来る」という表現にならざるをえない。一方(例 11b)を直訳すると「彼は私が行くことは必要ないと文章だけで述べていた、そして、それ以外のものはなかった」となる。ここでは視点が「私の帰省先（出発地）」にあり、私が「目的地の東京へ行く（andare）」という表現になっている。しかし、森田氏論文の転移しやすい条件⑥に記載されている「電話や書簡のように両者が別々の場所にいるにもかかわらず「来る」を用いるのは、話し手が聞き手と同じ場にあるとの意識から生まれた発話だからである」を勘案すれば、「venire」が用いられてもよさそうに思われる。

(例 12a)私も三人目にとうとう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。(134)

(例 12b)Il terzo fui io : andai nella mia stanza per aprire la busta che avevo in tasca.(107)

ここは、「私」が「昏睡状態に陥った父の病室（出発地）」から席を外して、「自分の部屋（目的地）」に移動する場面である。(例 12a)では、目的地が私の縄張りであることが影響[6]してか、「来る」が使用されている。しかし(例 12b)では、私は父の病室から自分の部屋に向かう過程にあるものと判断して、「andare」が使用されている。

②「Vに来る」の場合…用例数 0

③「Vて来る」の場合…用例数 1

(例 13a) 一寸御待ち、今顔を洗って来るから(95)

(例 13b) Aspetta un momento che mi vado a lavare la faccia.(75)

これは「帰省した私を迎えた父（話し手）」の挨拶言葉である。(例 13a)では父は「私を迎えた庭（出発地）」から「裏手にある井戸（目的地）」で顔を洗った後、再び「私を迎えた庭（出発地）」へと移動する、すなわち、「戻って来る」のであるから、「来る」が用いられている。一方(例 13b)を直訳すると「私が顔を洗いに行く僅かなあいだ待ってくれ」となり、別の角度からの表現になっているので「andare」が使用されている。

§6　用例の分析（その 2）

本節では【目的 2】の解明をめざして、同行の用例を精査することにする。紙面の都合上用例は簡潔に、また、構文が不明にならないように日本語原文のほうには【　】内の左側に移動主体を、右側に同行者を明記する。また、日本語原文に目的地が現われていない場合は、《　》内にそれを明記する。なお、伊語の動詞は可能な限り不定詞形に変換して出現ページ順に提示することとする。

(1)「行く」が「andare」で訳されている場合…用例数小計 8

①「行く」が単独で用いられている場合…用例数 7

【先生・奥さん】音楽会だの芝居だのに行く(26)：andare a qualche concerto o spettacolo(20)

【私・先生】上野へ行く(34)：andare a Ueno(26)

【奥さん・私とお嬢さん】日本橋へ行く(177)：andare in un negozio di Nihonbashi(142)

【私・K】何処かへ行く(201)：andarcene da qualche parte(163)

【私・K】避暑地へ行く(201)：andarcene in qualche fresca località(163)

【私・K】房州へ行く(201)：andarsi sulla costa di Boshu(163)

【私・K】富浦へ行く(202)：andarcene a Tomiura(164)

②「Vに行く」の場合…用例数 1

【私・他人】墓参りに行く(20)：andare a far visita al cimitero(16)

③「Vて行く」の場合…用例数 0

(2)「来る」が「venire」で訳されている場合…用例数小計 3

①「来る」が単独で用いられている場合…用例数 1

【西洋人・先生】《浜》最初一緒[3]に来た(11)：lo straniero che all'inizio era venuto con lui(9)

②「Vに来る」の場合…用例数 0

③「Vて来る」の場合…用例数 2

【主治医・院長】《父の家》院長を連れて来る(125)：venire con il primario dell'ospedale(100)

【私・K】私の宅へ引張って来る(192)：convincere a venire da me(156)

(3)「行く」が「venire」で訳されている場合…用例数小計 3

①「行く」が単独で用いられている場合…用例数 2

【お嬢さん・私と奥さん】《日本橋》お嬢さんも行く(177)：venire anche la figlia(142)

【K・私】何処へ行く(201)：venire con me(163)

②「Vに行く」の場合…用例数 0

③「Vて行く」の場合…用例数 1

【私・妻】《墓地》伴れて行く(20)：venire con me(16)

第 2 表

移動動詞		andare		venire	
行く	行く（単独）	7	8	2	3
	Vに行く	1		0	
	Vて行く	0		1	
来る	来る（単独）	0	0	1	3
	Vに来る	0		0	
	Vて来る	0		2	

本節の集計結果をまとめたのが第 2 表である。第 2 表によれば、"「誰それと同道して行く」が「andare」で訳される場合が 8 例、「venire」で訳される場合が 3 例であった。そして、「誰それと同道して来る」が「venire」で訳される場合が 3 例であった" などのことが分かる。ここで注目すべき点は、①「誰それと同道して来る」が「andare」で訳される場合がゼロであったこと、②「誰それと同道して行く／来る」はイタリア語では「venire」で訳される場合が通例であるのに、「andare」で訳される場合が意外に多かったこと、の 2 点である。

§7 まとめ

以上、夏目漱石『こころ』の日本語原文とその伊語訳を資料として、「行く／来る」と「andare／venire」との対応関係を調査した結果、「行く」が「andare」で訳されている場合が最も多く 49 例、次いで、「来る」が「venire」で訳されている場合が 28 例であった。いずれの場合も「行く／来る」が単独で用いられる場合が圧倒的に多い。しかし、「行く」が「venire」で訳されている場合が 5 例、「来る」が「andare」で訳されている場合が 4 例あった点にも注目すべきである。

さて、日伊両言語において、「行く」が「venire」で訳されたり、「来る」が「andare」で訳されたりする環境であるが、§5 での検討の結果、以下の 4 点が挙げられる。

① 話し手が聞き手（あるいは、第三者）と同行して目的地へと移動する場合【(例 5)・(例 7)・(例 9)】

② 話し手が自分の勢力圏へと移動する場合【(例 6)・(例 12)】

③ 話し手が既に目的地に移動してしまっている場合【(例 8)・(例 10)】
④ 視点（または、表現）が別の角度からのものになっている場合【(例 11)・(例 13)】
いずれにしても、「行く／andare」よりも「来る／venire」の用法のほうが複雑である。

次に、「話し手が聞き手と同行して目的地点へ移動する場合」、「行く／andare」と「来る／venire」のいずれが対応するかという問題であるが、§6 での検討の結果、以下の 2 点が挙げられる。

①「誰それと同道して来る」が「andare」で訳される場合がゼロであったこと。
②「誰それと同道して行く／来る」は伊語では「venire」で訳される場合が通例であるとされているのに、「andare」で訳される場合が意外に多かったこと[7]。

「行く／来る」は、たとえば「売る／買う」・「教える／習う」・「貸す／借りる」と同様に、互いに反対方向の動作を表す動詞である。したがって立場・観点が変われば動詞も変わるという非常に微妙な表現である。本稿では日本語原文とその伊語訳を資料にしたので、訳者が日本語原文（すなわち、作者の夏目漱石）と同じ立場・観点から移動動作を考慮しているかどうかという点に疑問がないわけではない。したがって、厳密な場面設定をしてインフォーマントの聞き取り調査を行ない、本稿での調査結果を補強していく必要があるように思われる。

注

1) 拙稿『日伊対照言語学研究』(『広島大学大学院文学研究科論集』第 61 巻特輯号 2、2001, 73p.)
拙稿「指示形容詞の日本語・イタリア語比較対照研究…「この」・「その」・「あの」と「questo」・「quello」…」(『ロマンス語研究』第 37 号、2004、pp.11-20)
拙稿「日本語・イタリア語発話動詞比較対照研究」(『広島大学フランス文学研究』第 24 号、近刊。【「言う」・「話す」・「語る」と「dire」・「parlare」・「raccontare」との比較対照を扱ったもの】)
2) 夏目漱石『こころ』新潮文庫、昭和 63 年 108 刷
3) Natsume Soseki : *Anima*, traduzione di Nicoletta Spadavecchia, 1987, L'Ottava, Milano
4)「一緒」は原文では「一所」と記されている。
5) 但し、伊語の「andare／venire」には助動詞としての機能があるということに注意しておく必要がある。たとえば、andare には以下のような構文が存在する。「andare+過去分詞」構文(「～されなければならない(当然・義務を伴う受動態)」の意)、「andare+ジェルンディオ」構文（「だんだん～となる（継続・反復を伴う進行形)」の意)、「andare+a+不定詞」構文（「～しようとする、～する準備をしている」の意）などがそれである。また、venire にも「venire+過去分詞」構文（「～される（受動)」の意）

が存在する。

6) 本稿§2の森田氏論文記載の5項目のうちの②を参照。

7) 石橋幸太郎ほか編『英語語法大事典』大修館 1982, p.482によれば、英語においても同様の現象が見られることが指摘されている。すなわち、“話し手と聞き手のいずれかが他方と同行する場合にもcomeがよく用いられます。…ただし、この「同行」の場合には次の例のようにgoの用いられることもあります。それは行き先がはっきりしないときにとくに多いようです。I got my car. You wanta go with me?「僕は車があるんだ。きみ、いっしょに行かない？」I go with the kids.「わたし、みんなと行くわ」(網掛け古浦)”とある。伊語においても、第2表によれば、“「誰それと同道して行く」が「andare」で訳される場合が8例あり、このうち「行き先がはっきりしない」用例として、以下の3例が存在する。

◎音楽会だの芝居だのに行く(26)：andare a *qualche* concerto o spettacolo「【伊語直訳】*どこか或る*音楽会または芝居に行く」(20)

◎何処かへ行く(201)：andarcene da *qualche* parte「【伊語直訳】*どこか或る*場所に行く」(163)

◎避暑地へ行く(201)：andarcene in *qualche* fresca località「【伊語直訳】*どこか或る*涼しい地方に行く」(163)

これらの用例にはいずれも、行き先に不定形容詞 qualche「(どこか) 或る」が付加され、行き先が不特定の場所になっている。これに対して、「誰それと同道して行く／来る」が「venire」で訳される場合の6例に関してはいずれも、行き先に不定形容詞qualcheは付加されていない。したがって、未だ用例数が僅少で確としたことは言えないが、伊語にも英語と同様の傾向が存在する可能性があるように思われる。

参考文献

石橋幸太郎ほか編『英語語法大事典』大修館 1982

田中春美ほか編『現代言語学辞典』成美堂 1988

森田良行「「行く・来る」の用法」(国語学会編『国語学』第75号 1968, pp.75-87)

Dizionario Garzanti della lingua italiana, 12ª edizione, 1974